

明文治學大全正集

第十八卷

菊池幽芳



(非賣品)

印檢者權作著

恩地孝四郎裝幀

明治大正文學全集・第二十一卷・第三十四回配本

昭和三年六月十二日印刷

昭和三年六月十五日發行

著者

菊池清

著作權者

和田利彦

印刷者

木呂子斗鬼次

發行所

春陽堂

東京市京橋區南傳馬町二丁目六

東京市京橋區南傳馬町二丁目六

東京市京橋區南傳馬町二丁目六

電話 東京橋(56)六五二
四四一五
振替東京一六一七

印刷所 共同印刷株式會社
製本所 高崎製本所
製箱所 中田製箱所
印刷所 竹田印刷所
製紙場 富士製紙株式會社
表紙布地 生田商店
口書印刷所 早川印刷所
見返印刷所 塚本印刷所

明治大正文學全集 第十八卷 目次

菊池幽芳篇

己 が 罪 (前篇) 二七

己 が 罪 (中篇) 三七

己 が 罪 (後篇) 三九

乳 姉 妹 (前篇) 一七

乳 姉 妹 (後篇) 二〇〇

著者 筆蹟……………六三

私の著作其他

年表、解説、自叙傳に代へて（菊池幽芳）……………六六

著者 近影（卷頭）

己が罪(前篇)

菊池幽芳

第一

「あら善くつてよ、妾知らないわ、先生に云ひつけてあげるわ。と云ひ捨てつゝ、結び流したる束髪を風に靡かし、海老色縹子の袴を纏へして學校の運動場を走り行く、十三四のあどなげなる少女の後を見送りて、

「ほゝはゝ」と笑ひを合はしたるは十六七より八九まで三四人、いづれもこの私立高等女學校の女生徒なり。

「あの娘の姉さんなら妾見た事があつてよ、どこへお嫁にいくんですつて、まだ十六位よ、まア！」

「ほゝ水庭さんが羨ましさうな顔をなすつて、貴嬢も早くお嫁にお出遊ばせ。」

「厭よ、誰がお嫁なんかに行くもんですか、厭な事よ、ねえ、綾子さん。」

「それでも貴嬢文學士がお好だと仰しやつたぢや有ませんか。」

「知りませんよ。」

「ほゝそんな顔返はさなくつても善いわ、文學士がお好ならお好でいゝわ、川口さん、貴嬢何がお好き。」

「川口さんなら醫學士よ。」

「ほゝお間違ひですわ、醫學士のお好のは箕輪さんよ。」

「箕輪さんて云へばあの眞箇ですか。」と桃削の髪に海老色の袴したるが聲を潜めて問出るを、年長なる高く揚卷に束ねて、こちたき鼈甲の止針したるが引取りて、四邊を見廻しながら、

「貴嬢、まだ御存じないの、大變な評判なのよ。」

「まアそんなですか、醫學校の書生さんですつて、眞實でせうか、屹度嘘だわ、箕輪さんに限つてそんな事なさる筈は無いわ、いつも品行點では一番ぢや有ませんか、優しうつて雅やかで親切で、勉強家で。」

銀杏返しのが遮りて、

「大變な提灯持をなさる事よ。」

「提灯持ちやないわ、全くだわ、眞實だわ、妾のやうな不勉強のお轉婆とは大變な違ひよ、ねえ、嘘ですよ、屹度。」

揚巻は口元に冷やかなる笑ひを浮べて、「貴嬢もよつぽどお目出度いのね、もう確かな證據まであるんですもの。」

「公然と約束なすつた位の事ぢや有ませんか、ソシなのは構はないわ。」

「おや貴嬢もそんな口がおあんなさるの、ほゝ、まア冗談は置いて結婚約束の許婚のといふやうなんぢや無いんですわ、ね、善く氣をつけて御禮遊ばせ、この頃は肩で息をなさるぢや有ませんか。」

「あらほんとう!？」

さも意外なりと云はんばかり他の三人は等しく聲を發ちて揚巻の顔を見詰め、

「妾、聞いては居ましたけれど、よもやそんな事とは……ほんとうですか。」

「まア!」「まア!」

揚巻は得意に四邊を見廻しながら聲を潜めて、

「それを知つてゐるのは妾丈よ、この頃は息使ひが苦しさうで居らつしやるから御覽なさい、そればかりぢやないわ、始終袖で隠すやうにしてらつしやるわ、その筈でさね、もう眼に立つんですもの、四月か五月よ、きつと、よくあれで學校に來てらつしやると思ふの。」

「まア!」

「まア!さう——!」

「それで分つた、これ迄はなか／＼活發でいつも牙々してらつしやる方だのに、この頃は餘まり運動場へもお出なさないし、何だか元氣のない顔をしてらつしやると思つてたわ、それでどうねえ、まア!」

「呆れて仕舞ひますねえ、人は見かけによらないものです事、あの方がまア!」

「だから思案の外と申しますよ。」と揚巻は態とらしく濟し込て結論しぬ。

「おや噂をすれば影ですよ、箕輪さんが此方へお出なしますよ。」

「おや眞實に……: : : どれ弄かつて上ようぢや有ませんか。」

と揚巻の云ひ出せるに桃割の可憐なるは眉を蹙めて、

「アラおよしなさいよ、お可愛相ですわ、妾彼方へまゐりますよ。」と仲間を外して彼方に立去りぬ、揚巻は口元に例の冷やかなる笑を見せ、

「構やしないわ、學校の風紀に係はる事なんだもの、打捨て置く却つていけないわ。」と云捨ながらこれより五六間手前を過去らんとする少女を手招きして、

「箕輪さん、ちよいと！ちよいと！」
 箕輪と呼ばれたる少女は呼ばれて此方を見返りながら立止りしが、三人が笑を啣んで立てるを見てそのまゝまた過行かんとせるを、揚巻はえこそ通すまじと調子に力を入れて、「あら箕輪さん、環さん、いゝ話があつてよ、一寸ていゝからお出遊ばせ。」

第二

呼かけられたる少女は、呼ばれて事の心は知らねど、平生餘り意地の善からぬ友なり、何を云はるゝかと何事にも心弱きさまにていやゝながら此方に歩み來りぬ、年は十七歳前後なるべし、目鼻立殊の外優れたるに、色くつきりと白く、面長の品位ある顔立に髪をば揚巻に結びたる、少しは映り善く、先の揚巻なるとは月と星ほどの相違あり、樺色なるリボンの止針したるも愛らしく、例の袴さへ殊の外善く似合ひたり、稍憂を帯びたる姿の前に俯むき氣味にして、帯の間に左の手を廻はすやうにして挿入れたる、誰が目にも思ひありげの素振なり。

前の揚巻は他の二人に眼配して、
 「箕輪さん、貴嬢この頃何うか遊ばして？」

「いゝえ、別に……。」と氣の無き聲にて答へぬ。
 「だつてちつとも運動場へいらつしやらないぢや有ませんか、何うか遊ばしたのよ、何處かお悪いのよ。」
 「さうねえ、お顔色もお悪くつてよ。」
 「皆さんで今心配して居た處なのよ。」

「おやまア御心切に……いゝえ、どうも有やしません、ただ頭痛持だもんですから……何か妾に御用？」
 何か云はれはせずやと不安の顔にて三人を見學たる少女は一刻も早くこゝを去らんとせるなり。

「まア少しお話し遊ばせよ、いゝ事をお聞かせ申しますよ、水庭さんてば今貴嬢の事をヒステリーぢやないかつて仰しやつてゐたの。」

「え！」
 と少女の顔を赧らむる時、

「アラ、いつ妾がそんな事を申しました、箕輪さん、嘘よ、川口さんは酷い事仰しやるのよ。」

「ほゝそんなにむきになつてお怒りなさらずと善い事よ、けども箕輪さん、貴嬢ほんとにどつかお悪いのよ、御醫者にお見せ遊ばして？」

「妾もう往きますよ、用があるんですから。」と少女は他を

いうてこゝを逃れ出んとしぬ、揚巻は争てか逃すべき、「一寸！ いけません！ 云ふ事をお聞なさらないと皆さんに申しますよ。」

何とは知れず容易ならぬ詞に、少女は度膽を抜かれて、ハツとしながらおどく、と揚巻を見詰めれば、

「ほゝ、ほゝ、ほゝ」と左も心地善げの高笑ひ、囊の中なる犠牲を思ふさまに、さいなまずんば止まじとするなり。

「アラ何か有るの、お聞申したい事よ、秘密？」揚巻のこれに答へんとする前に少女はさも哀を乞はんとするが如き眼光にて揚巻を見詰めぬ、揚巻は済し拂うて、

「何も有やしないわ、秘密なんぞ、ねえ、箕輪さん。」

「妾ほんとに彼地へまゐりますよ。」

揚巻はこの可憐の少女の耳元に叫びて、

「それなら皆さんに申しますよ。」

少女は如何なるわが秘密をこの意地悪き友の握り居るならんと、驚き且悲しみつゝそこに立すくみぬ。

「皆さん、そんなに箕輪さんの事を御心配なさらずといゝわ、箕輪さんにはお醫者さんがついてますとさ。」

「あら！ さうですか。衆目の一身に集まれる時、少女は顔を赤うして差俯むきぬ。

「けどもお醫者ではお門違ひだと思ふわ。」

「だつて産科醫もあるわ！」

只見る俯むける少女の耳元は、髪根まで朱に染むべく思はれたり、三人は顔を見合はしながら、

「どう遊ばしたんですよ、箕輪さん、貴様大層遊ばせらつしやるのよ。」

「お可哀相に川口さんがいろくゝの事を仰しやるからよ。」

「箕輪さん、堪忍して頂戴な、妾なんぞなんにも知りやアしないんですよ。」

「よし貴様の秘密を知つて居つたにしろ——御免遊ばせ、もし有ましたらですよ、妾達はこの場きりよ、誰にだつてお喋舌なんか仕ませんわ。」

少女は最早堪へ得可くもあらず、幽かに「知りません。」と云捨てゝ駈出れば、後には揚巻の笑ひ聲聞えて、

「箕輪さん、そんなに駈るとお毒よ、お腹に觸りますよ。」

箕輪と呼べる少女は意地悪き友等の嘲り笑ふ聲を後にして運動場をかけ抜けしが、再び校庭には登るまじと誓ひて、そのまゝ學校の門をふらくと出去りぬ、わが住へる方に泣きに行けるなるべし。

第三

「妾もう學校なんか行やしないわ……誰にも遭やアしない……死んぢまふわ……」

一開張の机より俯伏したる顔を擧し少女の眼はいたく泣
張れたり、この獨語ちたる言葉の内には小さき胸に堪へ得
ぬ無限の悲みと、痛苦とを含むべく思はれぬ、この少女は
箕輪と呼べる先刻の女學生なり。

こゝに少しく少女の身の上を語るべし、この少女は攝津
天下茶屋村の豪農箕輪傳藏の娘にて名を環と呼び、十歳の
時母を失ひ、その後は父傳藏の手一ツにて養はれ來りしな
るが、傳藏は老年にて産けし一人の女子と云ひ、金錢に事
缺かぬ事として蝶よ花よとの寵愛一方ならず、さればお乳母
日傘に育ちし身の、環は嚴格なる庭の訓を受けし事なけれ
ど、伶俐しき性質にて萬事に物優しければ、人にも愛され
行末の望みを勵されて、はや幼なき頃より天下茶屋の名物
とはなれるなりき、普通の教育は受けさせられど、傳藏餘り
教育には重きを置か、別して女子の學問は無益ぞと常々
考へ居たる事として、一わたりに打捨置けるのみ、素より
家庭の教育など云へる事は傳藏の考にも及ばてありぬ、

されど環は幸ひにも學校好にて常に優等の成績を得來るに
ぞ、後には傳藏もそれを誇るやうになりけるが、環が高等小
學校を卒業せし際の事、傳藏はそれだけに學校の生活は
止めさせん考なりしを、その頃天下茶屋に地所を求めて
そこを永住の地と定めたる大阪府選出の國會議員立花義一
と云へる名望家あり、傳藏もこの人物とは親しく最も尊
敬を表し居けるが、立花夫婦はいたくこの環を愛し、傳藏
が小學の課程のみにて止めさせんと云ふを聞き、懇々とそ
の不可なるを説き、今日の時勢にては女子とても普通の智
識を修むるの必要ある事を諭す處ありけるより、傳藏も漸
やくその氣になり、十四歳と云へる愛兒を手放して東京の
信用ある某私立高等女學校に入れたるは今より足掛四年
前の事なりけり。

高尚の學術を修めんことは素より環の願ふ處なれば、東
京に來りても善く課業を勵むより校中にての評判も善く、
殊に標榜は年と共にその光を増し行けば、漸やく年頃にな
るにつけて、墮落書生等が噂の種となれる事も少なからざ
りき、二年程の間はかの立花家の知人が住へる方に身を寄
せて、そこより通ひ居けるが、その人の東京の地を去りて
より後は、通へる學校の裁縫部の教師をなし居る大木小枝

子の許に身を寄せ、今もその教師の家の一間、己が部屋と定まれる四疊半に泣伏し居れるなりき。

そもやこの可憐の少女がかかる噂の主人公となるは何故ぞ、今は何事をも明白ならしめんために此間の悲しき消息を傳へざる可からず、いで環が常に書生等の注目の的となれる事は前にも説きぬ、かゝる書生の中に基督教徒なる塚口虔三と云へる醫學書生あり、彼が如何なる理由にて基督教徒なる看板を求めしやは知らず、一たび環の姿を見てしより、これをわが掌中に弄びて戀の巧名せんす野心禁ず可くもあらず、さて如何にして手に入れんと速りにその策を巡らしぬ、此男實家は福島縣の素封家にして金錢に不自由なきより、いつも學資の外の遊蕩費まで取寄せ、遊興を試むるなど、姦淫を禁じ戀愛の神聖を説ける基督教徒としての彼の行ひには眉を顰む可き事多けれども、醫學は非常の熱心にて學校中の俊才と目さるゝとぞ、さはれ戀に對してはひたぶるに只肉慾あるを解するのみ、殊に虔三は醫學上の見地より聖經正反對の旗幟を翻へし、肉慾以外に戀なしと諷刺的論と唱へ居る男とて、素より高尚なる趣味のその間に存する事など解す可くもあらず、されば無垢の少女を漁すはやがてその心靈に拭ふ可からざる傷跡を残す

ものなりとは、少しも彼の思ひ及ばざる處にてあるなり、憐れなる環はかゝる冷酷なる無情男子のために見込まれたるなりき、かくて醫學書生虔三は無垢可憐の少女環を手に入れんとして心の中に思ふやう、大將を狙はゞ先づ馬を射よ、環を獲んとするにはまづ美人の身を寄せ居る宿の主婦を射落さざる可からずと、こゝに虔三は此策を實行せんがために、速りに環が宿の主婦なる今の高等女學校裁縫部履教師大木小枝子に取入るの手段を運らしぬ。

第四

醫學書生塚口虔三が環を手に入れんがため取入らんとしたる小枝子は、幸ひにも虔三が同郷人にして今こそ互に路傍の人をもて目し居れ、虔三の幼なき頃は屢々小枝子の家に出入し居たる縁故あるを奇貨として、遂に小枝子に言葉を交すの機會を得つ、次に虔三は早くもその炯しき眼をもて、小枝子が餘り嚴格なる婦人にあらざるのみか、金錢のためには大抵の事は辭せざる可き性質なるを認め得たれば、虔三は己が心の儘なる黃白をもて遂に小枝子の心を取入れつ、未だ容易に環を戀ふる事をこそ言出てされ、小枝子は早くも事の心を推して、心私かにこの間の周旋をなすを辭

せじと思ひ極めたるなり。

虔三は色白く鼻高く、眼涼しく眉秀でたる一個の好男子なり。たはれたる女學生等の間には彼の噂は早くも高まり居りつ、さはれ環は少しも顧みる處無しものから、猶小枝子の家に屢々出入するより相共に茶話をなして時を過す事もあり、素より何の考へともあらぬなれど、心に物ある小枝子は陰にて頻りに虔三の人物を賞そやしつ、品行を讃へ、義理に富るを説き、學校にての成績拔群なるを語り、この世に最も頼母しき男なるかの如く説示して、暗に環の心を動かさんと勉むると共に、環が小説を好めるを利用して勝手なる戀愛論をなし、青年男女の戀の極めて神聖なる事を説き、その側よりもまた環を動かさんとしつ、虔三と小枝子との間に捕虜となりたる哀れなる環は、最早この陥穽の逃るゝ事能はざりき、果敢なくまた頼無きは若き男女の戀なるよ、これを例ふるにかの浮萍に乗るが如く、戀の成る時はやがてその身の沈没する時なるを、さりとて知らぬ中が花なりけり、凡そ想像の樂しきは總ての樂しみの中にて殊に樂しき中にも、わけて妙齡の男女がその想像力の最も旺なるに任せて戀愛の極樂園を想像するの時ほど樂しきは無るべし、郎と共に花を見月を賞づるを夢み、樂しき

を共にし憂を分つ可き事を思ひ、琴瑟和合せる家庭の快樂を思ひ、相離れては玉章を一行の雁に寄せて暮天の悲しみを慰めん事を思ひ、彼を思ひ此を思つて未來の想像を逞うする時は、望益を多くして樂しみ極まる處を知らず、少年の戀はかくの如くにしてその胸の下もえぞめつ、かくて未だ親しみし事なき斯る青春の男女が一たび相遭ふ時は、單り物珍らしきのみにはあらず、一種云ふ可らざるの味ひを感じるはこれぞ他性の互に相感化する妙理にして、必らずしも不思議にはあらざるを、二人の間には既に何か定まれる緒の結ばれ居るにはあらずやと信じ、己が想像の走するに任してわれから淺臺なる戀を作るが多し、環はわけでもかゝる想像の豊なる方なれば心の中には早くも高尚なる戀を理想し、戀愛の神聖なる可き事を信じて少しも疑はず、さはれ素より痴れたる心にはあらで、肉慾の樂しみなど求めん心はさら／＼無く、どこまでも神聖なる戀に忠實ならんとこそ願ひ居たるなり、あはれ世馴れぬ乙女の戀に對する心はよし神聖なる可きも、これは砂の上に築ける城廓なるを如何にせん、虔三を賞讃ふる小枝子の言葉を聞く毎に、その身の嬉しさは優り行き、虔三の來るも何となくいぶせからず、果は心待のせらるゝやうにもなり行けば、小

枝子より語り聞かざるゝ戀愛論の一しほ身に染みて、心に相許せる男女が、時來らん迄清く潔よく交はらんは如何に高尚なる楽しみにてある可きなど、心に思ひ居たる想像界の樂しみの、やがては實にせらる可き日の、來らんやうなる心地し、こゝに可憐なる少女の胸には、戀てふものに描かれそめしなりき。

あはれ清き男女の交際！ 若し虔三が環と同じ理想を抱ける健全の青年にてあらんには、その清き樂しき交際は續けられて戀に對する環の主義は實行せらるゝの日ありたるならん、されど虔三は環の世馴ぬ眼鏡にて判斷したる如き青年にはあらざりき、憐れむ可きは環が戀の行末なるかな、機然せりと見たる小枝子は學校の暑中休暇を利用して、環を伴うて箱根に赴むきぬ、何ぞ知らん宿に至れば、かの塚口虔三の室を取りて主人顔に待ちてあらんとは、環を箱根に連出したるは虔三の策略なりき、彼は意中を小枝子に告げてその同意を得つ、環に彼の待居る事を知らさずして伴ひ來らしめ、こゝに日頃の望みを達せんとはしたるなり。

第五

環は思ひ懸ぬ虔三のまづ在りたるに驚きたるも、わが惡

からず思ふ男の事なれば、却つて喜ばしげなる心地もしつ、殊に先生のある上はと一方ならず心を慰めたるなりき、されどそは空顧めにして二日の後一通の電報は來りて、小枝子に至急歸り來る可き事を告越し來れり、こは兼て仕組める事ならん、小枝子は倉皇荷を纏めて歸らんとするに、本意なしとは思ひながら己も共に歸らんと云ふを、自分は直ぐに引返し來るべければ、是非とも待居よとの小枝子の言葉に、流石に男と居るが恐ろしく再三歸らんと主張したるも許されず、後に虔三を便に止まる事となり、こゝに可憐の羊はまんまと狼の手中に落ちぬ、この後の事は殆んど記すに忍びず、只一語、環が理想の清き交際は全く破れ畢んぬ！ 環が方には幾千の辯解あらん、羊はいかに腕くとも狼の手を逃れ得可からず、犬は伶俐なるも猶狐の甘言に欺むかるべし、虔三が蜜の如き甘言と鐵の如き非常手段とは環ならぬ如何なる女をしてもその毒手を逃れ能はざらしめたるならん、さはれ百の辯解ありとも、潰れたるは何處までも潰れたるなり、あはれ純潔無垢なる笋輪環は最早此世にあらずなれるなり。

環が今日しも學校より泣歸りたる迄の事情は多く説くまでもあらじ、環は遂に虔三の胤を宿したるなり、その恐る

べき秘密をさへ同じ學校の友に見破られたるなり、始め環は妊娠を知りてより心苦しき事一方ならず、小枝子には素より處三にも告ずして獨り小さき心を痛め、いかにして此始末をなさんとわが身の罪の空恐ろしく、思ふ男の淺まし、此頃の心苦しきは夢の間の樂しかりしに引かへて、いと切なるに、よしなき戀を悔れども及ばず、さりとて男の戀しさは異ならず、此れに悲しさつらさを慰さめ來りしもの、はや人に後指さるゝやうなる心地のせられて、學校に登るさへ心咎め、近き中にわが身は是非とも退校せざる可からずとは思ひ決しながらも、故郷の父に何とその理由を説明し得可きなど思ひ煩うては、それもまだ人目に立つほどにもあらぬを善き事にして今日明日と過ぎ來りしなるを、思ひきや學びの友にまでその秘密を知られしとありては、如何てか人に顔向のなる可きや、それやこれやに打まぜて我身の行末を考ふれば悲しく心細く何となさん分別も出でず、たゞ此上は小枝子と處三に身の振方を談合するより外はあらねど、此事を知りなば父の傳藏の何といふ可き、思ある立花夫婦のいかに見下果たる女と思ふならん、それよりも悲しきは傳藏の二人の中に故障を入れてその中を引裂かんは必定なるべしなど思ふにつけては先立つものは

涙のみ、胸は張裂くばかりなるに、眼を泣脹らして幾十時か有けん、忽ち人の入來るけはひして「環さん」と呼ぶものあり、環の耳には入りしや入らずや、机に俯伏したる顔は元のまゝなりき。

こは主婦の小枝子が學校より歸り來りて環の室を訪へるなりき、年は四十路を越したるべき赤ら顔の肥太れる、髪に癖ある小さき眼の餘り打上らぬ顔を鼠色の被布に品作りたり、環を呼べども聲なくて泣伏せるを見て優しく、

「環さんや。」と又呼かけて肩に手をかけ、

「何なさいましたえ、學校にも晝から見えなかつたぢや有ませんか、何かなすつて、アレさ環さん、よッ……。」

「ハ…….:イ…….:。」

啜泣の聲のみ聞えぬ、小枝子は環の傍にべたりと坐りて、「泣てらつしやるの、どうなすつたのさ、仰しやい、よ、仰しやい。」

環は漸やく顔を擧て、

「妾口惜しい事が……。」

小枝子は泣脹したる環の眼をじつと見て、

「まア眼を赤くなすつてよ、嫁口さんと喧嘩でもなすつたんぢやないの、そんな事なら知りませんよ。」

「アラ、先生、ソんな事ぢやなくつてよ、ほんとうに口惜しくつて、悲しくつて、妾どう致さうかと思つてますの。」
 しみる、悲しげに小枝子を見學たる哀れに打たれて、
 「それぢやどうなすつたんですよ。」

第六

環は俯むきたるまゝ、
 「今日學校で川口さんや水庭さんにいろんな事をいはれたんですもの。」

小枝子は打笑うて、「ほゝソんな事なの……いゝぢや有ませんか、貴嬢も氣が弱い、妾ならあの人は妾の戀人ですとか何とか云つてやりまされ、ほゝ。」

「先生、そればかりなら宜ござんすけれど……いろんな事を……」

小枝子は首を捻りて、
 「いろんな事、どんな事をさ。」

「……………」

「分らないお娘ですよ、どんな事をあの人達にいはれたのですよ。」と環を窺きこみぬ、環は堪得てまた机に俯伏せるまゝ答へもなし。

「妾知つてますよ、何て云はれたか、當てゝ見ませうか、環さん。」

「え。」

環は驚きてまた顔を挙げぬ、小枝子は滑らかなる調子にて、

「環さんや、貴嬢、妾に隠し立を遊ぶのがお怨みですよ。」

環は迷惑相に、「だつて妾は何も先生に……」

「でも今日お友達にまで云はれたと仰しやるぢや有ませんか。」

環は青ざめたる顔にやゝ紅をさして、

「え。」

小枝子は笑ひながら聲を潜め、

「知つてますよ、貴嬢嬢をなさいましたね。」

ハツと机に俯伏たる環の眞白なる襟元は、髪の間際迄を紅に染出せるなりき、小枝子は暫らくは美はしき環の襟元の顫くを見詰てありしが、時を計りて、

「環さんや、妾に仰しやるに何も恥かしい事は御座いませんわね、御覽なさい、お友達にまで知れて仕舞つたちや有ませんか、ね、その事を云はれたんでせう。」

環は答なければ、答へぬは顔きたるなりと、小枝子は眉を顰めて、

「併しほんとに目の早い人達だよ、困つた事になつて来た。」と呟やきて、「環さん、だから早く妾に仰しやればよござんしたものを……、妾も氣が附いたのは此四五日よ、まアいやね、もう仕様がないわ、善から妾にお任せなさいよ……、それで學校の方はどうなさるお積りなの。」

環は漸やく顔を擧て、「もう學校へは出ません。」
怨めしげに小枝子の顔を見やりぬ。

「そりやアみんな妾が悪いんですから……こんな事におんなさるのも妾があつて何してあげたからですから、そりや貴嬢の事は屹度妾がお引受申しますよ……たゞあの口の悪い川口さんなどに知られて仕舞つたには困つちまひましたねえ、妾も心では學校の方も考へてたんですけれども、かうなつちやア仕様がないのね、併し早速塚口さんとも相談をして悪いやうにはしませんから、安心してお出でなさいましな、學校へも五分お出なさらないやア、何も口惜しい思ひも恥かしい思ひつなさらずといふでせう、きな／＼思はずと氣嫌よくしてつしやいましたな、泣顔をなさると塚口さんに嫌はれますよ、ほゝ。」

環は悲しげに、

「學校の方なんかもう思ひ切つて仕舞ひました、けれど故郷の父にコンな不始末が知れたらどう致さうかと存じて。」
「それなら知れつこはないぢや有ませんか、百五十里も離れてゐる上つて此間御上京なすつたばかりですから、當分減多にお出でなさる事ぢや無し……。」

環は涙を拭ひながら、

「だつて妾は塚口さんと分れる氣は御座いせんもの。」
「分つてまされ、そりや分つてまされ、塚口さんだつておんなじ事よ、妾も是非御一緒にしてあげなけりやア、これ迄お周旋をした甲斐がないと思つてますのよ、ほゝ。」

「けれどもそんな事……父に知らずに出来ないぢや有ませんか、妾どうしても……どうしても父の許を受なけりやいよ、それでなきや氣が濟みませんものを……。」

「おや知れたら大變だと仰しやるし、また許を受なけりやならないと仰しやるし、それぢやどうしていゝか分らないぢや有ませんか。」

「妾にも分りませんもの……。」

「ほゝ困りもんですよ。」

小枝子は暫らくして、

「貴様、どうしてもお分れなさる事は出来ないんですね。」
 「その位ならいつそ死んちまつてよ。」と思入つたる顔付なり。

「これほど思つてるのだから添はして上て下さいとお手紙をお國へ出して見ませうか。」

「いけないと云つて來たら妾生では居ませんよ。」

「それぢや、うっかり手紙も出せないのね。」

さも困つたと云ふ顔付にて、

「始末がつかないよ。」と聞えぬほどに呟やき、

「ぢや斯うしませう、妾が塚口さんと呼んで何かの事を薦と相談をするとしませう、それが一番、一番御安心でせう。」

と打笑ふ、環は至つて眞面目に、

「けれども塚口さんはいつも身を入れて聞いて下さらないからいやよ。」

「ぢやそれもよしませうか。」

「アラ—」

「おほ—」

第七

「だつて困つちまふぢや無いか、今更そな事をいつたつ

て。」

と冷やかに葉巻をふかせるは二十六七の苦み走れる好男子、琉球の袷に同じ羽織を被りたる、これぞ醫學書生にして基督教徒なる塚口虔三なり、これと差向ひて坐せるは例の大木小枝子、女持の烟管を灰吹にトン／＼と叩きて、
 「どつちがですよ、そんな事を仰しやられて、妾こそ今更困つて仕舞ひます。」

「そんならどうすればいいかね、小母さん。」

「どうすればいいつて、貴君、全體どうなさるお積りなんですよ。」と小枝子は頗る眞面目なり。

虔三は平氣なもので、

「何をさ。」

小枝子は睨む眞似して、

「今何の話をしてるんですよ、何をつて、これをさ。」と小指を出す、虔三は鼻で笑うて、

「フ、シ、廓のかね。」

「アレさ、環さんか、だから貴君にも困つちまひますよ、だから環さんがこれんばかりの角をお生しなさるわ。」

「フ、面白くもない。」

「まアそりや殿方の甲斐性ですからよとして、こつちは